

研究報告

遊戯環境下における幼児の縄跳び遊びに関する運動観察

Exercise observation of jumping rope play in young children under the play environment

大森 宏一

大阪信愛学院大学教育学部

要旨

本研究は、幼児期における縄跳び運動の上達について、遊戯環境下において幼児の縄跳びがどのように変容するのかを運動観察した。ここでは、バランスをとる、ジャンプする、腕で体を支える、縄を回す、コマを回す等の遊びの活動を行い、縄跳びの直接的な助言を行わずに遊戯環境を通しての縄跳びの上達を検証した。調査では、同意が取れた幼児8名全員の上達が確認できた。またビデオ分析から以下の6つのことが確認できた。その結果、①年少児は、後ろ跳びのほうが自然な動きであることが確認できた。②ジャンプ運動において跳びあがるときに腕の動きが下から上へとジャンプの補助的な動きがなくてもジャンプできることが確認できた。③年中児以降の、縄回しにおいては剣道回しが自然な動きとして確認できた。④連続とびでは身体の前で縄をゆっくり回すようにコントロールする動きが確認できた。⑤ジャンプ運動は、かかとが臀部につくような動きから省力化した動きへ変化していることが確認できた。⑥大人の縄回しでは、手首を中心とした滑らかな動作を行うが、幼児の場合は上腕から肘にかけて回すことが確認できた。

以上のことから、多様な動きの遊びを中心とした環境設定をすることにより、用具を操作する動き及び、縄回しとジャンプする動きの統合ができたことから縄跳び運動の発達を確認することができた。

Keywords : 幼児期 縄跳び遊び運動 多様な動きの遊び 環境設定 保育者

I. はじめに

スポーツ庁¹⁾によると、令和4年度の全国体力・運動能力の調査では、コロナ感染症の影響もあり、体力合計点が令和元年度より連続して低下したとしている。また、小学校・中学校ともに、前年度の活動として体育の授業以外で体力向上の取り組みを行った学校が増加したが、以前の水準には戻っていない。さらに、運動促進のための取り組みを実施している教育委員会の割合は、政令指定都市を除き低下したとしている。

子どもの体力低下については、コロナ感染症が流行する以前から、我が国では、問題としていたが、さらに拍車がかかった状態であると言える。そして、学校、保育施設、スポーツクラブなどで様々な取り組みがされていたがそれも低調化しており今後、それらを回復するための手立てが必要となってくる。

子どもの体力運動能力の向上を図る取り組みとして、小学校では体育の授業があるが、幼児期においては、幼稚園や保育所、認定こども園などにおける保育内での運動遊びの環境設定や、設定保育及び、時間外保育における運動指導などが主な取り組みを行う場となっている。

保育現場における運動指導の現状について平井ら²⁾によると、公立では担任の幼稚園教諭や保育士がそれぞれの考えで行っているケースが多く社会福祉法人や学校法人の幼稚園では株式会社が派遣する体育講師が指導を行っているところが多いとするも、正確な数は不明としている。具体的な内容については、器械運動と縄跳び、ボール運動がほとんどであり反復運動が主流であった。また平井ら²⁾は、保育現場でのアンケートなどで多かった質問内容として、縄跳びの指導が難しくどのような方法で子どもが跳べるようになるのかわからないといった内容が圧倒的に多かった。

縄跳び運動は、2020年以降のコロナ禍において、多くの学校が休校や遠隔授業、特別授業の形態をとる中で、ソーシャルディスタンスが取りやすく、自宅の近くの広場や公園などにおいても取り組みやすい運動として多くの子どもたちが経験したのではないかと思われる。

また井谷³⁾は、小学校体育における、鉄棒運動の「逆上がり」、縄跳び運動の「短縄前方順2回旋跳び(二重跳び)」は、日本の体育の通過儀礼的存在であるとし、重視すべき運動課題と位置付けている。

宮口ら⁴⁾は、縄跳び運動を運動学的側面から、「縄跳び運動は、ロープ回旋動作を伴う連続ジャンプで、両脚前足部で接地し、関節をほとんど曲げることなく行う素早いリバウンドジャンプである」と表現している。そして、この運動が代表的なStretch-Shortening Cycle, (SSC)運動であるとして、体幹や身体のパネ、骨密度の強化、敏捷性、心肺機能の向上を高める可能性が高い運動として評価をしている。

このように、縄跳び運動は、その運動特性からも効果が高く、教育現場においても重要な種目であるが、先述したように指導の難しさがあり、特に幼児期においては保育者が指導しにくい教材である。指導の難しさとして平井ら²⁾は、「すぐ飽きてしまう」「できない理由がわからない」「うまくできず諦めてしまう」「教え方がわからず反復練習ばかりになってしまう」「保育士が指導してもやる気が出ない」などとしている。

運動遊びの指導について三井⁵⁾は、未開拓な分野であるとしつつも、遊びと指導について整理しながら縄跳び遊びを例にとり、動き全体の中で捉えなおし、「遊びという活動にふさわしいもの」に構成していく研究が求められるとしている。

また杉原ら⁶⁾は、遊びの中で体を動かす子どものほうが大人に指示されて動く子どもよりも運動能力が高くなるとしている。

運動発達の要因は、運動量と運動の質であると言われるが、幼児の場合は特に遊びによるそれらの獲得が大切である。今回の調査では、縄跳びの直接的な指導は行わず遊びを中心とした内容で環境設定を行うことが、縄跳びの運動発達にどのような影響を与えるか検証したいと考えている。

II. 研究の目的

本研究では、直接的な縄跳び運動へのアプローチは行わず、体幹への刺激、バランス能力、片足・両足ジャンプ、などの体幹部分の発達を促す遊びや、指先や腕を使ったコマ回しなどの微細運動を伴う遊びを行う中で、子どもが夢中になって遊べる環境を設定し、「さまざまな遊びを楽しみながら、縄跳びに興味を持ち、なわに触れることによって、自然と縄跳びができるようになること」を目的とする。

本研究により、保育現場において、ねらいを持った運動遊びの環境設定の重要性を再認識して、保育内容の参考としての報告になると考えている。

III. 研究方法

1. 運動観察の対象者と方法

A 幼稚園通園の親子を対象とし、降園時に親子で参加できることを条件に、幼稚園ホールを使用して、自由参加として調査を行った。

2. 運動観察の時期

期間：令和4年10月20日から令和5年3月9日

毎週火曜日と木曜日の午後14時から15時頃まで 合計23回実施

3. 縄遊びの環境設定

スラックライン遊び、ミニトランポリン遊び、トレーニングラダー遊び、ゴムとび遊び、長縄遊び、短縄遊び、コマ遊びを幼稚園ホールに設定し、親子で自由に選んで参加できるようにした。

4. 縄跳びの用具について

短縄：持ち手部分が比較的長く操作しやすいと思われるものであることと、なわの部分がある程度の重さと空気抵抗が少ないと考えられるビーズロープを6本用意した。長さは少しづつ違うものを用意した。

長縄：直径1cm 長さ5m程度の縄を使用。片方を柱にくくり付けて回す人が一人でも遊べるように設定した。

5. 運動観察の方法と観察の観点

縄跳び遊びを行っている親子を対象にリクルートし、ビデオカメラ（JVC FULL HD）にて動画撮影した。

動画時間は、13分8秒であった。

6. 運動観察データの分析の方法

撮影した動画を、個別に分類し、日経変化を分析して考察を行った。

運動観察データ分析は、スポーツ・体育・保育内容健康などの科目担当している大学教員2名を調査研究として分析を行った。

研究における個人情報の保護及び倫理的配慮については、大阪信愛学院大学研究倫理委員会の承認を得ている。

（承認番号：令和4年度 信研倫 22-2号）

IV. 結果

1. 参加人数から見た環境設定

「さまざまな遊びを楽しみながら、縄跳びに興味を持ち、なわに触れることによって、自然と縄跳びができるようになること」を目的として研究を行った。

参加者数としては、年長児：26名（女児14名 男児12名）、年中児：30名（女児18名 男児12名）、年少児：16名（女児9名 男児7名）、未満児：2名（男児2名）の合計74名（女児41名 男児33名）であった。延べ人数合計259名で毎回15名前後の親子参加があった。

参加人数の多さから、親子で楽しみながら参加できた魅力のある活動であった。そして、スラックライン遊び、ミニトランポリン遊び、トレーニングラダー遊び、ゴムとび遊び、長縄遊び、短縄遊び、コマ遊びの環境設定をしている中で、子どもたちは自然と縄をもって回したり電車ごっこのロープとして友達と遊んだりする姿が見られた。

また6本の縄を用意したが、縄の順番待ちができることが多くあったことから、子どもたちは縄に非常に興味を持っていたことがわかった。

2. ビデオ分析結果

延べ20名のビデオ撮影の同意が得られたが、期間において2回以上継続的に撮影できたのは、年少児3名、年中児3名、年長児2名の8名であった。

(1) 年少児の事例

男児 A 12 回参加	11 月 23 日 縄跳びのグリップ持ち方が上下逆になっている。縄跳びの前回し跳びをやろうとしているが回すこととジャンプのタイミングが一致せず動作が途切れている。 (写真 1)	3 月 9 日 跳び方、回し方には特に変化はないが、グリップは正しく握れている。	
女兒 B 12 回参加	10 月 27 日・11 月 8 日 縄跳びは後ろ回し跳びをしようとしている様子がわかる。ジャンプと同時に腕も上に挙がる	3 月 9 日 ジャンプで腕が上には挙がる、後ろ回し跳びを跳ぼうとして縄を頭より後ろに回すことができている (写真 2)	
女兒 C 8 回参加	10 月 27 日 縄を前や後ろに回して遊んでいるが、時々ジャンプをして縄跳びの真似をしているかと思われる	1 月 17 日 前回し跳びと後ろ回し跳びを交互に行って縄を跳べてはいるが、縄跳びのイメージができていないと思われる	3 月 9 日 後ろ回し跳びで足裏で縄を踏むところまでロープが来ている。かなりの高さでジャンプができています (写真 3, 4)



写真 1 持ち手グリップが逆



写真 2 ジャンプの時に手が上にある



写真 3 後ろ回し跳びのジャンプ時



写真 4 着地の際のロープ位置

年少児の3人は、前回し跳びよりも後ろ回し跳びから縄跳びを始めようとしている様子がわかった。3歳児での上腕の回旋は、後ろ回しが自然であることがわかる。またジャンプと同時に腕が上に挙がるため縄が跳べない状態になる。

A児において、顕著な上達はなかったが、縄に興味を持ち遊んでいる姿がよく見られるようになっていた。またミニトランポリンを雑巾掛けの要領で滑らせて遊んでいる姿もみられた。開設時間前から終了後の片付けまで目いっぱい遊んでいる姿が印象的で、運動にたいして興味があり今後のここでの活動効果が楽しみな園児であった。

C児の事例において、本研究では、縄をとびこすことはできなかったが、あと少し(片足のみ数センチ)でできそうなところまできており、数回のちには縄を跳び越せるようになるだろうと予測ができる跳び方をしている。

(2) 年中児の事例

男児D 15回参加	11月24日 後ろまわし 手がうえの時ジャンプ		3月9日 3回前とび 一回旋二跳躍 両手を上から合わせて前に回す剣道回しスタート時前ならえから開始 (写真5、6、7)	
男児E 15回参加	1月31日 バラバラ跳び 剣道回し一回ずつ 単独回し肘が後ろへ引く手首はおしりの後ろまで行く	2月9日 <u>一回旋二跳躍 20回</u> 2回目ジャンプの時一回旋二跳躍へ移行する直前 二回ジャンプできるように跳躍する準備段階がある	2月16日 <u>一回旋二跳躍 23回</u> 跳んだあと手がリズムよく肩の高さで止まって縄の速度を調整している (写真8)	3月9日 <u>一回旋二跳躍 22回</u> 跳ぶ高さが低くなる (写真9)
女児F 15回参加	2月9日 一回旋一跳躍 4回連続		2月16日 <u>一回旋二跳躍 13回</u>	3月9日 <u>一回旋二跳躍 10回</u>

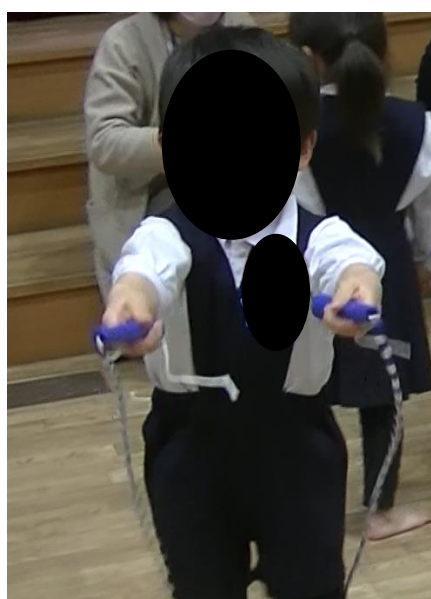


写真5 前ならえの状態

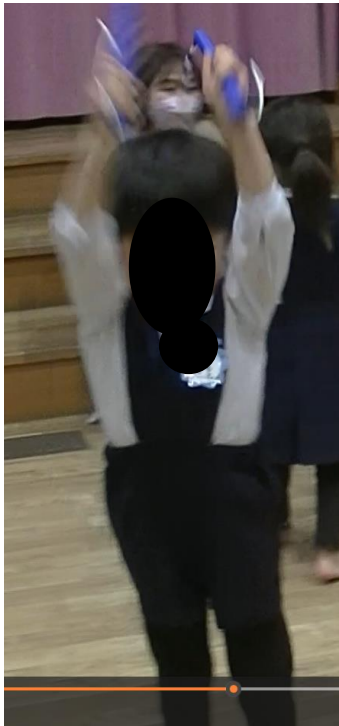


写真6 剣道回しのはじめ



写真7 剣道回し中間

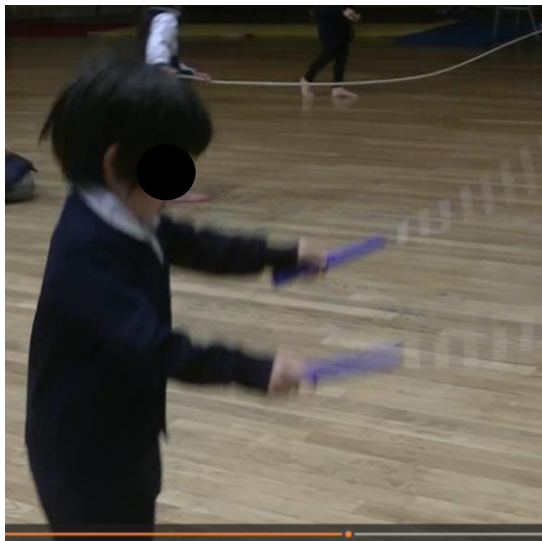


写真8 縄回しの後 調整している腕

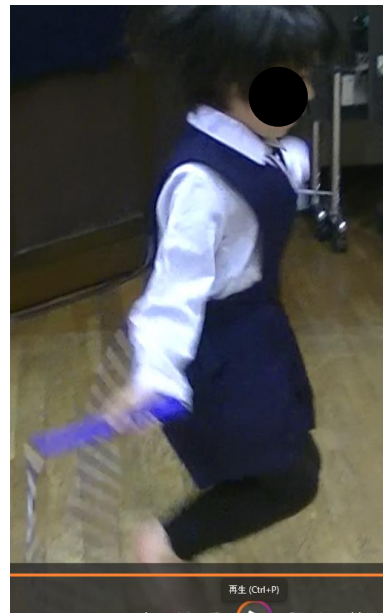


写真9 跳びこすときの高さ

年中男児Eは、15回参加しており、1月31日では腕の回旋とジャンプがバラバラであったが、2月9日には、一回旋二跳躍で20回連続して跳ぶことができるようになった。この9日間の間にどの程度練習していたかは不明であるが、保護者からは「急にできるようになった」という言葉が聞かれた。自宅においても少しは縄遊びに触れたことは想像できた。ビデオ分析において、なぜ急にできるようになったかについては不明である。

(3) 年長児の事例

男児 G 6 回参加	11 月 15 日 6 回前に大きくジャンプしながら上腕全体を棒のように使って回している なわが後ろの時は手が横 剣道回し 手が一度回外する (写真 10)	12 月 6 日 一回旋一跳躍 4 回 縄回し大きい 縄を前にするとき手が回外の抑制を始める ジャンプした時かかとが臀部につく。	1 月 31 日 一回旋二跳躍 6 回その場で跳べる 剣道回しでリズムとる ジャンプが低くなり、リズムが良くなる (写真 11)	3 月 9 日 一回旋二跳躍 5 回 ジャンプした時にかかとが臀部につかない
男児 H 8 回参加	1 月 17 日 腕足バラバラ一回旋跳び	2 月 9 日 なわとジャンプがあってきている一回跳びを続ける 一回跳躍後足でリズムをとるその時腕を回す、バラバラでも一回旋二跳躍に近い		

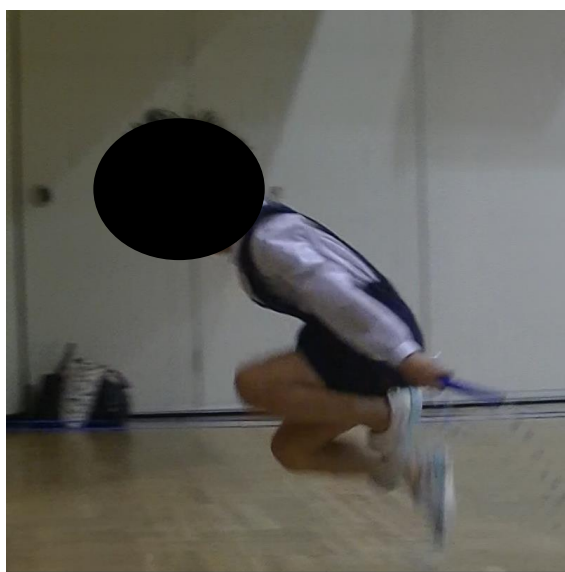


写真 10 腕を棒のように使っている



写真 11 ジャンプが低くなる

年長児 G は、一回旋二跳躍が 6 回できるようになったが、ぎこちなさが残る跳び方であった。しかし参加回数が 6 回と少ない中で跳べるようになってきている。2 か月足らずの間に、一回旋一跳躍から一回旋二跳躍への変化があった。

年長児 F は、一回旋一跳躍跳びを止まりながら続ける跳び方であった。縄を跳んだあと、一度休憩が入り、手が回外した後、剣道回しになる。縄跳びのイメージはできているが、縄とジャンプがまだ連携していない。

その後一回旋二跳躍に移行しそうな跳び方になるが連続しての跳躍は確認できていない。

※剣道回し なわを回す際に、上から下へ剣道の素振りのようにして回す方法である。この名称は筆者独自の呼び方で正式な呼び方ではない。

今回のビデオ分析から、①年少児は、後ろ跳びのほうが自然な動きとして確認できた。②ジャンプ運動において跳びあがるときに腕の動きが下から上へとジャンプの補助的な動きがなくてもジャンプできることが目安となった。③年中児以降の、縄回しにおいては剣道回しが自然な動きとして確認できた。④連続とびでは身体の前で縄をゆっくり回すようにコントロールする動きが確認できた。⑤ジャンプ運動は、かかどが臀部につくような動きから省力化した動きへ変化していることが確認できた。⑥大人の縄回しでは、手首を中心とした滑らかな動作を行うが、幼児の場合は上腕から肘にかけて回すことが確認できた。

上記の6つのことが明らかになった。

V. 考察

参加人数から見た環境設定については、本研究では、縄跳びを子どもに直接的に指導せずに自然に縄跳びに触れる機会を提供したことで、子ども同士、または保護者同士の競争意識を必要以上に駆り立てずに楽しむことができたと考えられる。

また、普段の遊びでは行うことが少ない遊びの環境設定をしたことも、子どもの興味を引き出して、内発的な動機づけを促した遊びとなって、運動量と多様な動きの獲得に貢献できたと思われる。

エピソードとして、保護者から「ここでの活動を楽しみにしている」「ここで遊んだ日は、よく睡眠がとれる」という声が聞かれた。保護者同伴の降園時であったことにより保護者と一緒に遊びたいという思い、活動意欲が高くまだまだ活動したいという思い、仲良しのお友達とも遊びたいという思いなどから、ここでの運動遊びは、子どもの多くの欲求を満たす場所になっており、子どもの運動に対するポジティブなよい影響を与えたと考えている。

また保護者同士のコミュニティの場にもなっており保護者の精神状態にもよい影響を及ぼしていると思われる。保護者がここに来たいと思うことは、同時に子どもがここで活動できることになるため、運動量の確保の面でも効果があったと思われる。

子どもの同意が得られずに2回の撮影で上達の検証ができないケースも多かったが、ビデオ検証ができなかった子どもであっても上達した子どもも多く見受けられた。また保護者から「できるようになりました」と声が聞かれることもあった。2回の同意が得られなかった子どもについて、4歳児のケースであるが、研究当初は、縄跳びが跳べなかったために撮影を嫌がっていたが、跳べるようになって撮影を許可してくれたこともあった。

年齢別に見た子どもの変容について以下のことがわかった。

年少児については、後ろ回し跳びが自然な動きとわかったため、縄跳びの指導においては、後ろ回しを行いつつも、縄の前まわし遊びを入れながら同時に経験させることが重要であると思われる。

またジャンプと同時に腕が上に挙がるため縄が跳べない状態になることから、ジャンプ運動の時に腕を挙げなくてもよくなるようにジャンプ運動の自動化を図る遊びを数多く経験することが大切であると考えられる。

年少児は、できないことについて行う場合は飽きたり、集中してできないことが多いため、設定保育で行う場合には特に遊び要素を充分に取り入れたものを環境設定する必要がある。特に、年少児では前回し後ろ回しにこだわらず、縄跳び遊びを楽しむことが重要であると考えられる。

C児は、もう少しでできるようになることが予想されたが、写真3にあるようにジャンプがかなりの高さでできるようになっていることも跳べそうな要因であると思われる。特にC児は、親子でスラックライン遊びやゴムとび遊び、長縄遊びをする姿が印象的で、ジャンプ運動の発達には、環境設定により多くの遊びを存分に遊んだものによることが大きいと考えている。

年中児については、E児が、急にできるようになった要因として、ジャンプの仕方と縄の回し方の変化であると考えられる。

ジャンプ運動では、ジャンプの際に常にかかどが臀部につくような跳び方ではなく、より省力化した低い跳び

方になっている。(写真9)

縄回しにおいては、回し方がスムーズになっており縄跳びの上達には縄回しが大きなポイントになっていると考えられる。縄が背中から頭を超えて胸の前に行くところが滑らかになっており、肩甲骨の内転と外転がうまく連動しているように見える。また、縄を回している腕が肩の前あたりで少し止まるように見えるが、そこで縄の速さを調整している動きがみられる。縄をコントロールする動きが縄跳びには重要で、E児は縄をうまく操作して縄の速さとジャンプの動きを調整して連動させている様子がわかる。(写真8)

E児は、ここでの環境設定においての遊びとそのほかの生活環境で、兄弟姉妹や友達関係などの遊び仲間の存在があったと考えられる。切磋琢磨する仲間、見本となる仲間の存在も上達に関係していると考えている。

今回は、ビーズロープを使用しており、この縄を使用したことも上達には関係が深いと思われる。幼児の場合、できないことはすぐに飽きることが多いため、なるべく行いやすい道具を使用することも楽しく上達させるには不可欠の要素であると思われる。

年長児については、G児の上達の要因として考えられることとして、ジャンプ運動の省力化と縄回しとの連動があげられる。ジャンプの際にかかとが臀部につくようなジャンプの仕方から、臀部につかないジャンプの仕方へ変わっている。

縄回しとジャンプ運動の連動によりジャンプが低くても縄を跳べるようになってきていると考えられる。縄を回す際に、腕全体を棒のように使って回すところから徐々に肘を使った回し方に変化しているが、何度も縄回し遊びを行った結果、よりスムーズな縄回しを獲得したのだと思われる。

しかし手根骨の未発達から大人の縄回しのように手首を柔らかく使った回し方にはならず、肘を使った回し方になったと考えられる。

年長児Fも上達が見られたが、低調であった。F児は、縄跳びに興味がないわけではないが、他児との追いかけて遊びや他児とのかかわりを重視した遊びなどが楽しいようであったため縄跳びに関わる回数がすくなかったと思われる。

VI. まとめ

今回幼児8名のビデオ撮影の結果から、3歳から5歳児の年齢において縄跳びの上達が見られた。本調査では、縄跳びの指導を行っていないが、幼稚園やそのほかの場面で縄跳びを見たり縄をもって遊んだりする経験があったと考える。その経験から縄跳びとは縄をもって回しながら跳ぶ運動であることは、年少児であっても理解していると思われた。

ここでの調査では、様々な運動を遊びとして、スラックライン遊び、ミニトランポリン遊び、トレーニングラダー遊び、ゴムとび遊び、長縄遊び、短縄遊び、コマ遊びの環境設定し、親子で参加してもらったが、子どもが生き生きと遊んでいる姿が見られた。

特にスラックラインの遊びは、人気のある遊びで子どもたちが何度もチャレンジしている姿が見られた。通常のスラックラインは、1本の縄を綱渡りのようにわたるが、今回は2本のラインを使い、腕で体を支えながら渡るように設定した。不安定な遊びであるが、腕で支えることができるラインがあるので安心して渡ることが可能であり、子どものひざ程度の高さであるため怪我することなく安全に遊んでいた。子どもたちが数名で乗って揺らして遊んでいる姿がよく見られたが、このこともバランスをとることに寄与した遊びであったと考える。

ヒトの体は、体幹部分と四肢部分からできているがスラックラインは特に体幹部分の発達を促していると考えられるため、幼児には特に重要であると考えられる。また発達しているところは好んで何度も行う(機能快)といわれるがまさにこのことをさした活動であった。

さらに、ラダーを設定していたが、ケンケンパー遊びをしたり、ミニトランポリンを雑巾掛けの要領で滑らせて遊んだりしたことも体幹部分の発達を促したと考えられる。

次に、長縄は、片方を固定し設定していたが、保護者に回してもらって跳ぶ子どもや自分たちで回して遊ぶ子どもがいた。腕回しの運動がここではできていたのではないと思われる。

コマ回しも設定していたが、保護者も経験がない場合があり、筆者が子どもや保護者に遊び方を伝えて遊んでもらった。ジャンプやそのほかの粗大運動を伴う遊びと同時に指先を使う微細運動を取り入れたことも上達の要因であると考えているが、どの程度寄与したかは不明である。

エピソードとして、遊びの設定時間が終わると「終わりにたくない」「もっと遊びたい」と泣き出す子どもがいた。

くわえて、開始時間前の準備から来て待っている子どももいたことから、親からの承認欲求、自らの活動欲求、友達と一緒にいたいと思う親和欲求を満たす子どもの遊びになっており、魅力的で継続していたいと思う遊び場であったと考えられる。

今回の縄跳びの上達の要因であると考えられるのは、設定した運動遊びが主体的であり、多様な動きの獲得と運動量の確保ができたことに加えて、保護者同伴であることから安心して遊べたことが大きいと思われる。保護者同伴であったことに関しては、子ども同士のトラブルを解決することもスムーズで運動量の確保の点で重要であった。また保護者同士のつながりも見られたことは非常に意義があったと思われる。教師からの直接的な助言をせず見守りを重視することで、子ども同士および保護者同士のライバル意識を持たずに縄跳びにチャレンジできたこともよかった。

本調査では、ビーズロープという縄にビーズと呼ばれる2cm程度のゴムの輪が90個程度ついたものを使用した。通常の縄よりも跳びやすい。また持ち手のグリップも20cmと長く、縄の操作がしやすいものであることも回しやすさの要因であると思われる。

今回は、上達した理由として、細かな原因の追究まではできなかったが、運動遊びを多く経験した子どもは、多様な動きを獲得できたためにジャンプ運動の上達と縄を回す感覚が身についてできたと思われる。

縄の長さ、縄回し遊びの種類、ジャンプの種類、コマ回しやカスケードなどの協応運動につながる遊び等、主体的な活動である遊びということをキーワードにさらに効果的な縄跳び遊びにつながる環境設定を今後の課題としたい。

謝辞

この度、大阪信愛学院幼稚園において場所の提供をしてくださった、園長先生はじめ幼稚園教諭の皆様にご心より感謝いたします。また活動に参加してくださった親子の皆様、本当にありがとうございました。

本研究のビデオ分析では、京都橘大学田中真紀先生、大阪信愛学院大学荒木雅之先生について細部にわたり適切な助言をいただき感謝いたします。

本研究は、しんあい教育研究ケアセンターより助成金を得て研究を進めさせていただきました。あわせてお礼申し上げます。

利益相反 この研究において利益相反はありません。

引用文献

- 1) スポーツ庁「令和4年度全国体力・運動能力、運動習慣調査結果」.https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/toukei/kodomo/zencyo/1411922_00004.html. (参照日 2023年10月1日)
- 2) 平井博史・杉本憲男『幼児期における縄とび効果的指導方法の研究』中部大学・中部大学短期大学部教育実践研究第3巻2号, pp. 11-18, 2018年.
- 3) 井谷恵子『なわとび運動の共同的な学び』体育科教育, 大修館書店, pp. 20-23. 2011年.
- 4) 宮口和義・田口師永『児童期における効果的な「縄跳び運動」の指導法 ―二重跳び習得に向けたスピード

跳びの活用ー』石川県立大学紀要第5巻, pp. 105-111, 2022年.

- 5) 三井登『幼児期の運動遊びにおける指導法の課題』帯広大谷短期大学紀要第50号, pp. 127-136, 2013年.
- 6) 杉原隆・森史朗・吉田伊津美「幼児期の運動能力発達の年次推移と運動能力発達に関与する環境要因の構造的な分析」平成14年～15年度文部科学賞科学研究費補助金(基盤研究B)研究成果報告書, 2004年.
- 7) 杉原隆・川邊貴子「幼児期における運動発達と運動遊びの指導」ミネルヴァ書房, p. 86, 2014年.

受理 202年月日

公開 2024年4月1日

<連絡先>

大森 宏一

宛先 〒536-8585 大阪府大阪市城東区古市2丁目7番30号

電話番号 06-6939-4391 (代表)

E-mail omorik@osaka-shinai.ac.jp